

葬とまじなひ

——入棺以前——

水野正好

論文要旨

- 一 埋葬されない人々
- 二 死の前後のまじなひ
- 三 沐浴・剪爪・剃髪
- 四 『入棺作法』と造棺
- 五 亡者と曳覆曼荼羅

誕生と死、人間にとって必ず迎えるこうした二つの事態にともなつて、種々のまじなひが行なわれている。死を「死がもたらす穢れ」の発生源とする考え方と、死者を極めて楽しい極楽の浄土に往かせようとする想ひの発生源とする考え方が日本の古代・中世にはたがいに交錯して複雑な対応するまじなひの世界を生み出している。死穢の発生を避けるために死の直前、病臥する天皇を豈ごと他所へ移すことで御座の聖性を護り死穢を他に限定しようとする動きがあり、死者を生者として扱い、死穢を生じないようはかる伊勢神宮領の人々の動きがあり、死穢をめぐる対応が注目される。死の確認は、死者を北首西面させる行為で表現される。北首は既に暗冥の世界に旅立つこと、西面は願くば西

方極楽に往生させたいとの想ひの表現と見てよい。死者はその後、沐浴次第といふ作法に則り、沐浴、剪爪、剃髪、授戒といった順序を踏んで、死者として一層完璧な姿をとるようになる。その後は入棺次第と呼ばれる作法に従って、今生の別れとなる棺に納まることとなる。こうした次第は、最近、話題となつた元興寺極楽坊所蔵『入棺作法』や、各時代の日記・記録類、各宗の作法書も勘案することで極めて詳細に語りうるようになりつつある。こうした記事から沐浴、棺の造り、曳覆曼荼羅（経衫）を主としてとりあげ、その各場面に働くまじなひについて詳細に検討することしたい。